

1994-6-1/13

日本ポピュラー音楽学会
関東地区研究例会
成城大学7号館 716教室

中国のポピュラー音楽の動向

1994.6.19
橋爪大三郎
(東工大)

最近中国大陸流行音楽情况

□1□ 中国大陸90年代の音楽事情

……殷金第「十字路口的中国流行音楽」『瞭望周刊』1993年50期(通巻517):14-20.

☆93年:港台歌手の公演ラッシュ 92年22回→93年上半期18回、7~9月23回!

出演料も10万人民币元→100万人民币元と急上昇 cf.大陸歌手の出演料は100香港ドル
チケットも高額で空席が目立つ スポンサーまる抱えの公演(~祭)が多い.

*文化部芸術局副局長・曾慶懐の分析:中国ポピュラー音楽は曲がり角

80年代第一波・鄧麗君→西北風(中国オリジナル)→90年代・港台第二波

*作曲家・谷建芬の分析:旧管理体制と市場経済の不調和~過渡期 対策⇒歌劇・バレエ
-そのほか5大団体は国営とし、ほかは市場経済に移行すべき。

*作曲家・徐沛東の分析:中国ポピュラー音楽は市場経済に適応できず自滅状態

対策⇒スター・システムの採用、歌手の育成、音楽ビジネスの合理化

*作曲家・蘇越の分析:音楽づくりに問題がある 対策⇒ポピュラーな良質の作品を

☆大陸歌手と港台会社の「包装」(専属)契約 香港の「中国風」コンサートに出演した
歌手のうち、半分以上が契約

*中国新聞出版署音像司副司長・任裕の意見:音楽ビジネスの進歩だ、曲づくりにも歌手
の育成の点でもメリットがある。

*作曲家・徐沛東の意見:中国歌手が港台風になると困る、中国の会社と契約してほしい

*北京文化芸術音像出版社総経理・張和平の意見:港台の音楽製作体制を、大陸も真似
すべきである。歌手のイメージ~曲づくり~録音~MTV~営業まで、一貫させる

*作曲家・趙季平の意見:「包装」が立派でも、中身がよくなければどうしようもない

*作曲家・蘇越の意見:大陸の歌手は、質がまだまだ。歌だけでなく文化・教養に秀でて
いないと大成功は望めない

♪「跟着感觉走」(←1988 蘇芮『經典』飛碟企業有限公司)

♪「渡情」(←1993『新白娘子伝奇』[連続TVドラマ]台湾上格及香港風行唱片)

□2□ 大陸ポピュラー音楽の成熟

*大陸ポピュラー音楽も、港台ポップスに対抗しつつ着実に水準を高めつつあるが、90年代
に入ってこれといった方向を打ち出せないでいる。

*ひとつの行き方は、商業主義。音楽ビジネスを海外にならって強化し、タレント発掘や
メディア・ミックスを追求する行き方である。JASPM会員でもある蘇越が、アイドルタ
レント“兄弟”を発掘したり、新人アイドル歌手・黄格選を発掘したりして、この路線
を行っている。

*もうひとつは、重金属(ヘビメタ)。唐朝や黒豹は、海外でもデビューを果たした。北
京はバンド・ブームというが、聴いてみるかぎりでは、ただのコピーで面白くない。そ
れに比べると、崔健のバックをつとめていたADO-BANDは、格上で面白い。

♪蘇越「月滿西楼」(1994MTV)……陳凱歌の『霸王別姫』(音楽・趙季平)の影響?

♪唐朝「飛翔鳥」(1992『唐朝』滾石有聲出版社有限公司・台湾)

♪黒豹「無地自容」(1992『黒豹』滾石有聲出版社有限公司・台湾)

♪北京REGGAE楽隊「大生産」(1991『北京REGGAE』Golden Pony Records)

□3□ 崔健の『紅旗下的蛋』

*崔健は、90年代の音楽シーンを否定的に評価している。

*最近のアルバム『紅旗下的蛋』では、よりメッセージ性を重視し、若い世代の人びとに
状況を考える手がかりを与えようと意図している。

〔飛了(飛んだよ)〕

そんなもん、要らないぞ

ふらふらして身体に力が入らない

周りには人間の肉のにおいがする

人と人の事にあたまが行ってしまう

感覚がふらふら朦朧としている

いつの間にか身体が軽くなってきた

ほら 俺はみなと違うんだよ

まっ黒ななかにぼつりと白いみたいに

人びとの眼にはまるで霧がかかったよう

あたりを見回すのだが何も気づかない

俺は方向も道順もわからなくなった

どうかしちまったのかと思いはじめ

周りには火が着いたようなにおいもする

痲癩とも怒りともつかない火の着き方だ

俺は突然身体をひるがえす、ひと躍りに

俺は独り、飛んだよ

(中略)

その晩、俺はこっそり暗闇に戻ってきた

あたりはまだ前みたいなおいがしている

どうして俺に必要なものは空にないのか

ほかの場所にはない、ここにしかないんだ

何日か経って、みなが俺のことをみつけた

みなが目つきがどうもおかしい

突然、あの火が空気に燃え移った

俺は飛べなくなった

〔紅旗下的蛋(赤旗の下のタマゴ)〕

突然の開放だ

実は突然じゃないのだが

さあチャンスがやってきた

でもどうしたらいいのかわからない

紅旗はいまもひるがえるが

決まった方向はない

革命はまだ続いている

老人たちがまだ力を握っている

(中略)

権力は空中に消えていく

いつでも肩にのしかかる

突然、腐敗勢力に対抗しよう

という考えが頭に浮かんだ

身体はまだ軟らかだが

それでも叫ぶことはできる

あの朝方の太陽を見よ

紅旗の下のタマゴみたいに

(中略)

現実には石みたいだし

精神はタマゴみたいだ

石はカチンカチンに硬い

タマゴは生命がある

母親はまだ生きている

父親は旗竿だ

お前は誰だと聞かれたら答えよう

紅旗の下のタマゴだと

♪ NHK 衛星放送 VTR・中国のロック(崔健・「1989」・「眼鏡蛇」のインタビュー)

♪ 崔健「飛了」(1994MTV)~『紅旗下的蛋』

♪ 崔健「紅旗下的蛋」『紅旗下的蛋』

♪ 崔健「盒子(はこ)」『紅旗下的蛋』

神奈川県社会福祉協議会
平成5年度保健福祉講座

男女・家族問題を 考える

1994.3.18
橋爪大三郎



□0□ 自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。1977年東京大学大学院社会学研究科修了。無所属で執筆を続ける。1989年より東京工業大学助教授（社会学）。著書に、『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクションⅠ～Ⅲ』（以上、勁草書房）、『はじめての構造主義』（講談社現代新書）、『民主主義は最高の政治制度である』（現代書館）、『社会がわかる本』（講談社）、『小室直樹の学問と思想』（弓立社）など。訳書に王輝『中国官僚天国』（岩波書店3月刊）。竹田青嗣氏との対談が、今春に径書房から刊行される予定。

□1□ 家族は変わったか？

1) フェミニズムは家族を変えたか？

- * 性別 (sex) : 男/女の違い
 - 身体的 ⇨ 普遍的
 - 社会的
 - * 性別役割 (gender) : 男のあり方/女のあり方の違い ⇨ 社会・文化的 (= 可変的)
- 性別役割は、(性別) 分業システムから由来している



フェミニズム～女性学が、上の矛盾の構造を明らかにした 1970・1980年代→限界へ

- * 女性の社会進出：女性総体の利益 これを誰が代表するのか？

フェミニズム＝前衛＝意識革命の先兵

遅れた部分（ないし、敵）：①男性（家父長制）……フェミニズムは反体制となる
②専業主婦～性別役割に埋没～社会進出が遅れている
③美人～男性中心社会の価値に迎合 → ミスコン批判

しかし、フェミニズム自体が「遅れた現状」を前提とする「職業革命家」と化し、少数の人びとが特権的な言説を振り回すことで、大衆と遊離する傾向がうまれた。

2) 女性の社会進出は家族を変えるか

- * [定義] 家族：結婚と親子関係によって形成される集団のうち、極小のもの
家族＝結婚×親子関係
- [定義] 結婚：その社会で正当化される極大のペア
- [定義] 親子関係：母～子、父～子の中に、対等に成り立つ社会関係 ⇨ 父系/母系
- * 家族の形態…… 核家族 nuclear family
拡大家族 extended family イエ 門中（沖縄） 宗族（中国）

- 家族の変遷……Th. 産業化（都市化）の進展にともない、核家族化が進行する
- * 家族の機能……生産 農業～世襲制（家業） → 産業社会では解体
- 社会保障 弱者・病人の介護、老人介護 → 福祉社会では社会化
- 教育 職業教育（家業）→学校教育 → 近代国家では社会化
- 消費 衣・食・住 家事・育児 → 徐々に商業化・社会化
- * 女性の社会進出：賃労働＝社会化⇨家事・育児の社会化・省力化
- * 家族の原点……困ったとき、無条件で授けあえる関係（集団） ⇨ 条件つき
女性の社会進出によっても、この点は変化しないのではないか

3) 家族の危機

- * ノーマルでない家族形態の増加 単身世帯（晩婚・非婚・死別）、実験家族
- * 家族が社会から孤立する
 - ・情緒包絡（親離れ、子離れができない）
 - ・無規範（しつけができない）……
- * 今後、さまざまな家族（の機能的等価物）が増える。また、各人もライフ・サイクルのなかで、さまざまな家族形態を経過していく。かつてのように、ノーマルな家族で社会を被覆できるという前提では、もうやっていけなくなる。

□2□ 男女関係は変わったか

- 1) 性別役割～性別分業
 - 家族内分業……家事の分担、育児の分担、介護の分担、……
 - 社会大分業……社会的な威信の配分、資源の配分、……

家族内分業が平等になっても、社会大分業が平等になるとは限らない 例) 中国
- 2) 男女ギャップの拡大
 - 女性……高学歴化、晩婚化、結婚しなくてもいい症候群、ライフコースの多様化
 - 男性……女性の意識の変化について行けない、花婿学校・男性改造講座
- * 男性と女性は裏腹。男性が変わらないと、女性だけが変えることはできない。
- 3) 家族重視の時代へ
 - * 企業社会の変質 企業＝（擬似）共同体 ⇨ 企業＝生活の糧をうる場所/家族＝共同体
よき家庭人であることが、よき社会人であることとなる
 - * 市民社会の成熟 政治改革～選挙区に密着した政策型政党の登場～地域の自立
電腦社会～家庭と全体社会とが直結するメディア環境の成立
超高齢化社会～家庭人＝老人パワーが社会を動かす
- 4) あるべき男女関係を求めて
 - * 男女のコミュニケーション・ギャップ⇨女性がどこまで自分を語る能力を身につけるか
 - * “男らしさ/女らしさ”の流動化 男/女は相互的なので、女性の自己定義が変容し
始めれば、男性も自己定義の変更を迫られる
 - * 男女の多様性を支援する社会 企業/学校/家庭/行政 固定観念が敵
⇨あるべき男女のあり方（文化）の創造へ

21世紀・新世界の秩序

橋爪大三郎（東京工業大学）

ポスト冷戦世界は、湾岸戦争とともに幕を開け、日本でも五五年体制が崩壊するなど、ようやく変動の荒波を経験しつつある。

この時代の顕著な現象のひとつは、中国をはじめとする東アジア経済の勃興であり、それにとまなう米・中・日の国際的な政治経済秩序の再編にほかならない。経済面（国際分業）で言えば、日本は従来の輸出産業で比較優位を失いつつあり、そのための構造転換の過程（長期不況）に苦しんでいる。

アジアに立脚しつつ、しかも欧米を中心とする国際社会に緊密に組み込まれた国家として、日本はどのような進路を進むべきか——今後の日中社会学は、この課題との関係で、研究プランを構想すべきではなからうか。

□1□ 冷戦の集結と、新世界秩序の模索

1) 冷戦とは何だったか

- ・冷戦＝本来あるべき戦争が行なわれない、準戦時体制 核武装・超大国・米ソ対決
- ・体制：自由経済 vs 計画経済 軍事・政治が経済に優先 日独の復興
- ・超大国の凋落 ←軍備の負担 経済の行き詰まり→正統性の失墜→体制の崩壊

2) 冷戦が終わると、何が起こるか

- ・核軍縮 平和の配当（平和産業への転換） 日独は相対的利点を失う
- ・国内政治体制の変化 カンボジア和平/南ア民主化/中東和平/日本の連立政権
- ・国際分業の変化 鉄のカーテン（貿易なし）→貿易の利益 比較優位の変動

□2□ 東アジア（中華）経済圏の勃興

1) 改革開放の80年代

- ・中ソ対立にもとづく米中国交正常化（1972）→改革開放の開始（1979）～国内要因
- ・外資の導入 農業改革 インフラの整備 商品経済から市場経済の公認へ
- ・経済過熱と民主化運動→天安門事件（1989. 6. 4）：共産党一党支配下での市場経済へ

2) 高度成長の90年代

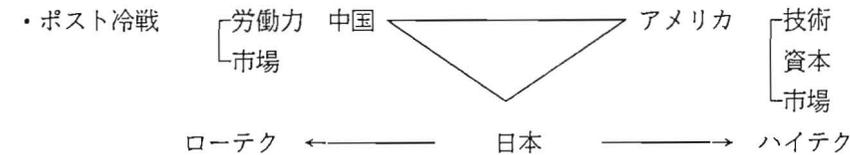
- ・広州→上海への重心移動 T字型戦略 外資導入の加速化 米国の政策転換
- ・21世紀中国ナンバー・ワン説 「社会主義市場経済」の定着（中国○↔ロシア×）

□3□ 日・米・中、三国関係の力学

1) 冷戦時代の東アジア

- ・日米戦争：中国←日本/アメリカ 極東に非自由主義的大国が出現することを嫌う
- ・冷戦：ソ連+中国/日本+アメリカ → 中ソ対立：ソ連/中国+アメリカ
- ・中国～軍事的プレゼンス～安保理常任理事国 日本～経済大国～経済サミット

2) ポスト冷戦時代の東アジア



経済は日本、政治は中国という「分割統治」の原則が崩れ、中国がもうひとつの大国として登場しつつある。その事実の追認～最恵国待遇

・日本の比較優位(comparative advantage)のゆらぎ

創造的研究開発…アメリカ 量産によるコスト低下…中国 日本は中途半端
アジアNIESの雁行体制は、中国の本格的離陸と香港返還によって、崩れる

□4□ 21世紀：新世界の秩序

1) 日本……イギリス的じり貧をたどる？

- ・高齢化/高所得化/産業空洞化 → 高付加価値産業へシフト → アメリカと競合
- ・バイオ/ナノテク/人工知能 → 研究開発から量産体制へ → 中国の追い上げ
- ・EC統合の道を進むイギリスと違って、日本はアジアで孤立傾向を強める

2) 中国……あくまでアジア・ローカルな、世界大国への道をたどる？

- ・人口12億（日本の10倍、アメリカの5倍）⇒一人あたりGNP \$2000で、世界一に
- ・共産党：中国の政治的統一→経済発展→社会主義 中国流の社会運営を譲らず
- ・中国の経済発展～ドメスティック ∴農村人口大 だが国外技術依存性高い

3) アメリカ……日本よりも中国を重視する政策に転換？

- ・ポスト冷戦世界の目標：×イデオロギー、×軍事 ○国力のバランス&協調
- ・アメリカの対中政策：中国への技術供与⇄中国への市場参入⇄中国の操作可能性
ソ連カードが使えないなら、中国経済を国際的ネットワークに組み込むしかない
- ・米・中・日で世界GNPの50%以上を占めるのも間近 ⇒ 米中の文化摩擦？

□5□ あるべき日中社会学研究とは

1) 専門家から万人の関心事へ

- ・専門家がフィールドに閉じこもる時代は終わった ⇒ 共通常識としての東アジア
- ・中国・東アジア研究機関の充実 政治～経済～社会～文化 研究費の充実
- ・西から東へ方向切り換え 新聞、出版、そのほかのジャーナリズムの発想転換

2) 構想力の回復を

- ・「実証」主義、専門細分主義～限界差異追求 ⇒ Weber の文明史的観点に立ち戻れ
- ・アジア近代化の二つのサイクル 日本(1868/1945～)/中国(1919/1949/1979～)
- ・構想力：現に調査しうること、資料で実証できること、を超えた枠組みをもつこと

3) 中国社会学との交流

- ・アメリカ（英語）社会学の隆盛 ↔ 日中の交流は進んでいない ∴言語の障害など
- ・急速に産業化しつつある中国は、多くの社会問題を抱えている ↔ 党・政府
- ・「研究」の枠を守りつつ、中国社会学界と共同研究を進め、資金の援助も惜しまない

(1) 2020～2030年までに、どんな変化があるか？

中国の台頭。中国のGNPは実質で2010年までに日本を追い抜き、2020年には世界一となる。当然、世界経済の重心は、東アジアに移動してくる。この結果、アメリカ(+欧州)と中国(+第三世界)との角逐が、国際社会の対立軸を形成するだろう。この角逐は冷戦と異なり、重大な軍事的対立をもたらすものではないが、世界経営の哲学をめぐめるものである点で、いくぶんかイデオロギー的色彩を帯びるはずである。

(2) その変化が社会に与える影響は？

日本は、依然として覇権国であり続けるアメリカと、勃興する中国とのあいだに挟まれて、大変居心地のわるい思いをすることになるだろう。その居心地のわるさは、二重である。第一に、国際分業の面で、製造業の大部分(現在日本が比較優位を有している分野)は、中国に奪われる。かといって、ハイテク分野に特化しようとする、アメリカと衝突する。第二に、価値観の面で、日本は中国と違って、アジア的传统にまったく自信を持っていない。かと言って、アメリカからは、文化的に異質であるとみなされ続けるのだ。日本が自己アイデンティティも国家目標も見失って苦しむ時期。それが、21世紀だ。

(3) 和歌山県の利点、不利な点、および戦略

和歌山県の利点は、臨海コンビナートをあまり発達させなかった後進性、および大阪との距離的近さにある。まず、人口は流出するものなら止めないこと。産業も下手に育てようとしないう方がいい。(提言にあったハイテク開発なんかも、やらない方がいい。)人口構成が一時的に偏るとしても、あと50年我慢すれば、解決する。その時点では、むしろ人口密度が小さいほうが有利になる。

和歌山は、(一部地域を除いて)大阪圏に通勤するのは無理である。とすれば、長期滞在型(避暑、避寒)のリゾート地、そして、退職後の居住地として、有望である。こうした人びとは、可処分所得が多く、また環境への負荷が少ない。こうした人びとは、日本中(あるいは世界中)どこにでも行けるのだから、競合地域との競争に勝てるよう、和歌山の利点を活かすべきだ。

(4) そのほか、和歌山県のとるべき戦略は？

和歌山県という行政単位でものを考える発想に、限界を感じる。関西～中部エリアとの一体性を踏まえながら、そのなかでこの地域の独自性を追求していくべきだろう。

提言にあったようなプランは、日本中のあちこちの県が東京の業者に頼んで、作文してもらっているやつだ。そういうものに、騙されないこと。ほかの県がやらないこと(あるいはあべこべのこと)をやれば、成功するチャンスが開ける。

(5) 社会の変化を見ずえる「哲学」とは？

語りはじめると長くなるので、必要最小限のことだけをのべる。

高度成長期を通じて、多くの自治体は、発展ばかりを考えてきた。その実、人口が流出し、過疎に悩むようになった自治体も多かったのである。すべての地域がすべての時代を通じて発展できるわけがないのは明らかであり、ときには縮小や下降を受け入れる長期プランも必要になる。

和歌山県がどれだけ人口を減らしても、現在のニュージーランドの水準には下がらないであろう。ニュージーランドにも自治体が機能しており、住民のアメニティは高い。政治(の選択肢としての政策)は現状から出発するほかないとしても、長期目標(政策の到達目標)は現状に束縛されてはならない。地域社会の目標は、住民のアメニティ(暮らしやすさ)を実現することであり、そのための活動の基盤を整備することだ。決して人口を増やしたり(減るのを止めたり)、産業を誘致することではない。交通・通信の発達、日本全体の流動性(および、国際的な流動性)を高める。人びとは最適であると思う場所に居住するだろう。和歌山の哲学は、人口減少・伝統産業(農業・漁業・地場産業)の衰退を前提として、その過程で、およびその過程が終了したあとで、アメニティの高い地域社会を建設することではないだろうか。たとえば投資の重点は、交通・通信、および病院におくべきだ。



□講師紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より、東京工業大学工学部助教授（社会学）。

著書：『言語ゲームと社会理論——ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクションⅠ～Ⅲ』（以上、勁草書房）、『冒険としての社会科学』（毎日新聞社）、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』（以上、講談社）、『民主主義は最高の政治制度である』（現代書館）、『崔健——激動中国のスーパースター』（岩波書店）。

共著：『小室直樹の学問と思想』（弓立社）、『僕の憲法草案』『自分を活かす思想／社会を生きる思想』（以上、径書房）、『試される言葉』『照らしあう意識』『身体への深みへ』（以上、JICC出版局）ほか。

訳書：『中国官僚天国』（王輝著・岩波書店）。

1. 1 ヴィトゲンシュタインはどんなスタイルで、ものを考えたか

たとえば……

Q 「ことば」はなぜ意味が通じるのか？ (1)

この疑問に到達した順序：飛行機の組み立てに興味→珮の実験→あるタイプのエンジンの開発が必要→プロペラの設計→数学→数学の基礎→フレイゲに面会→ケンブリッジでラッセルの門を叩く→論理学→哲学（論理学による自然言語の基礎づけ）→その失敗～言語はそれ自体で意味が通じなくてはならない

「ことば」が意味をもち、意味が通じることはとても当たり前と思われる。なぜなら、「意味が通じない」言語は、そもそも言語だと考えられないから。しかし、……

例1) 古代都市を発掘したら、言語（らしいもの）が見つかった。これが言語であることを証明できるか？

例2) 宇宙のかなたからの電波を分析していたら、言語（らしいもの）が見つかった。これが言語であることを証明できるか？

考察3) この証明の核心は、それを“われわれの言語”（すでに、言語であることが確定であるもの）に置き換える（対応をつける）ことができるかどうかにある。

考察4) 言語がなにであるかという知識は、われわれが言語を使って考えている事実から得られている。（この知識が根本的であるのに比べれば、ほかの知識——たとえば、原子核がなにであるかとか、フランス革命がいつ起こったかとかいう知識——は派生的である。）

例1) に関連して： Q 新発見の文字の解読は、暗号解読と似ているだろうか？

⇒暗号：ある言語の文字の体系を、特定の関数によって、別の文字の体系に置き換えたもの。この関数（コード）が秘密であるため、暗号の秘密が保たれる。

文字列→（エンコード）→暗号→（デコード）→文字列

暗号の解読：暗号から出発して、コードを解明する手続き

この手続きが確実に実行できることは保証のかぎりではないが、コード（文字と暗号との厳密な対応）が存在することは、保証されている。

⇒新発見の文字：ある言語の文字の体系そのもの。この言語が未知であるため、意味が不明である。

新発見の文字の解読：未知の言語（の文字）を、われわれの言語に置き換える手続き。この対応（関数）の存在は、かならずしも保証されていない。言い変えると、ある人が未知の言語の文字を解読したと主張したとしても、それが正しい解読であることを、別の誰かが確かめる方法がない。

結論として：新発見の文字の解読は、暗号解読と似ていない。

練習5) Q われわれの文明が、突然滅んでしまったとする。そうなる前に、われわれの言語（の意味）を、別の文明の知的存在に伝える方法があるか？

考察6) ある言語がどういう意味を持つかということを、そのある言語で書きしるしたとしても、その言語を理解しない人びとには伝わらない。

考察7) ある言語が意味をもつという事実を、その当の言語を用いて証明したり、説明したりすることはできない。

考察8) 言語が意味をもつのは、端的に意味をもつからであって、なにかの理由や根拠に基づくのではない。

考察9) われわれは、気がついたときにことばを「わかっている」のであって、なぜことばが「わかる」のかを説明することはできない。

⇒ヴィトゲンシュタインの結論：

ことばが意味をもつのは、それ以上還元できない基本的な事実である。

ことばが意味をもつとは、われわれがそれを、意味あるものとして（現に）使っているという事実のことである。

ことばの意味とは、ことばの用法であり、われわれの生活形式のことである。

われわれがことばを用いて、人間として生きているという事実の全体を、言語ゲーム（language game）という。

1・2 ヴィトゲンシュタインと、言語ゲームの思想

- (1) 世界は、分析可能である。 ←×
- (2) 言語も、分析可能である。 ←× ∵要素命題は存在しない

例27) 仏教徒は、「悟り」の存在を証明できない。しかし、彼らは「悟り」を信じている。それは、彼らが「悟り」の存在を前提してふるまっているからだ。すなわち仏教は、「悟り」を前提としてふるまう言語ゲームであると考えられる。

もう少し具体的に言えば、初期の仏教は、

- (1)「悟り」をたずねあうゲーム
- (2)ブッダを標本とするゲーム
- (3)ブッダのテキスト(経典)を伝持するゲーム
- (4)ブッダのルール(戒律)を守るゲーム
- (5)ルール違反(破戒)を告白しあうゲーム

の複合として記述できる。(⇨橋爪大三郎 1986 『仏教の言説戦略』勁草書房)

1・4 クリプキ(Saul Kripke 1940-) の、ルール懐疑主義(rule scepticism)

ヴィトゲンシュタインは、「考えるな、見よ!」と言った。見れば、言語ゲームのなかに、ルールをみつけることができる(言語ゲームをどこまでも続けられる)。

例28) 数列 2、4、6、8、10、……

例29) 加算 $1+1=2$ 、 $2+1=3$ 、 $3+4=7$ 、 $8+2=10$ 、……

考察30) 例28) の数列の一般項を $2n$ などと示したとしても、 $n=1, 2, ……$ と書きそえなければならぬとすれば、一般項に頼れない点では同じである。

クリプキの「くわ算」(quus)

例31) 「 $68+57$ 」は、あなたが初めて行なう計算である。あなたは 125 と答えたが、彼によるとこの答えは 5 である。なぜなら、くわ算 \oplus によれば、

もし、 $x, y < 57$ ならば、 $x \oplus y = x + y$

そうでなければ、 $x \oplus y = 5$

であるから。あなたが加算だと思ってきたのは、実はくわ算だったと彼は言う。

例32) 「グリーン (green)」と「ブルー (blue)」

グリーン = グリーン:それが過去、グリーンであった場合

ブルー :それが現在、ブルーである場合

懐疑論者は、あなたが過去「グリーン」だと信じてきたものは、「ブルー」だったと主張する。

考察33) 加算(addition)とくわ算(quaddition)とは、有限の計算例では区別できない。

考察34) 有限の例を通じて学ばれる任意の規則(きそく)に対して、くわいそくを考えることができる。

考察35) どんな規則(ルール)も、有限の例を通じて学ばれる。したがって、どんなルールも、それが正しいルールであることを証明できない。

この問題に関連して、ヴィトゲンシュタインは、「ルールに従っていること」と「ル

ールに従っていると信じていること」とは違う、と指摘した。

考察36) 「自分は加算ができる。自信がある。」とあなたが言っても、だめである。

練習37) 考察35) にもかかわらず、どの言語ゲームもルールをそなえている、とすることができるか?

練習38) クリプキの懐疑が正しいとすると、なぜわれわれは、世の中に規則(ルール)がある、と信じているのだろうか?

1・5 認知科学——人間とは何かをめぐる問い——へ向かって

ヴィトゲンシュタインは、言葉がなぜ通じるのかを考えることによって、「人間」を疑った。(デカルト、フッサールは、事物の存在や構成された自我の存在を疑ったが、疑う自分が「人間」であるかどうかまでは疑わなかった。)

ヴィトゲンシュタインは、あたかも地球外からやってきたエイリアンのように、「人間」について、そして彼らの営む「言語ゲーム」について、考察を始める。そして悩ましいことに、この「考察」は、彼ら「人間」たちと「言語ゲーム」を試行錯誤して通じてしか実行できない。そうやって彼は、生き始める。外から見れば、あたかもひとりの「人間」として。

ヴィトゲンシュタインの仕事は、すべて、このシチュエーションに帰着する。考えようによっては、これは子供じみた、瑣細で単純な疑問だ。だが別な角度からすれば、これほど深刻な(狂気に接近した)疑問もない。自分という精神活動の全体を、「人間」という枠組みのなかで理解できるかどうかという疑問。——この事情を踏まえないヴィトゲンシュタイン論は、ぜんぶ空振りになっていると私は思う。

*

言葉が通じるための条件を、のこらず書き出すことは困難である。この事実、フレーム問題に通じる。

人工知能研究の無謀さは、精神現象についての理論がまるでないのに、明示的な規則を書き出して、精神と同じ働きをする機械をつくり上げようとしたところにあった。

精神と精神の関係——理解——は、(当面のあいだ)理論によって「説明」することができない。そうだとすれば、精神であることが明らかなる存在——自分——が、他者や言語を「理解」するという事実を、出発点にするしかない。すなわち、

理解(精神の機能) ⇨ 規則

ではなくて、

規則 ⇨ 理解(精神の機能)

という構成をとらざるをえないのである。言語ゲーム論の意義は、ここにある。社会学や心理学など、精神現象をモデルの前提とする学問は、本質的に言って、言語ゲーム論のアイデアを出発点にするしかないであろう。ヴィトゲンシュタインは、コンピュータ以後の学問状況を、半世紀あまり前に考察しつくしていたことになる。



□0□ ゲスト自己紹介

- * はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ、社会学専攻、89年より東工大勤務。
- * 最近の著書に、『崔健——激動中国のスーパーstar』（岩波ブックレット）、『自分を活かす思想／社会を生きる思想』（竹田青嗣氏との対論～径書房）、『喩としての生活——21世紀を生きるために④』（五人の共著～宝島社）、『ニュースからマンボウ』（学習研究社・近刊）、『性愛論』（岩波書店・近刊）など。

□1□ 余暇とはなにか

(1)余暇～雇用主に管理されていない時間←→労働時間 単なる「自由時間」とは違う

- * “余暇／労働時間”の対比は、資本家⇄経営者⇄労働者の雇用関係（近代資本主義および労働市場の成立）を前提としている。 Cf.（中世の）職人；自営業者；自由業者
- * 余暇は残余概念である

24時間－労働時間－生活必要時間（睡眠＋家事＋家族のための時間）＝余暇

- * 余暇は自分のための時間である（可処分時間）

(2)余暇の人間関係

- * ①余暇を家族と過ごす／②余暇をひとりで過ごす／③余暇を共に過ごす関係
- 余暇を過ごす社会関係は、原則として、職場の人間関係ではありえない
- * 恋愛～結婚：③→① クラブ・サークル：③ 旅行：①⇄③、②⇄③
- * ③＝時間の共有にもとづく共同体 ただしこの共同体は、フルタイムであるのは無理

□2□ 居住空間とはなにか

(1)住宅～家族による空間の占有

- * 狩猟・採集社会／遊牧社会（季節移動）→焼き畑農耕社会（転住）→
- * 定着農耕社会 家族＝生産単位 ∴農家＝生産現場 時間・空間の分節は村落共同体
- (2)近代住宅～生産と切り離された家族のための住宅 単位

- * 工場制手工業（or機械工業）→生産と消費の分離→近代家族（家事労働）の成立
- * 大量生産・大量消費→「中流」階層の成立→住宅＝Σ個室（＋共用部分）

□3□ 余暇と居住空間の未来

(1)余暇の変貌 知識集約型産業：知的生産 表現者（アーティスト）への接近

- * 生産現場：工場・労働時間→オフィス&住宅・フルタイム
- (2)居住空間の変貌 人がモノを管理→コンピュータが人とモノを管理
- * マルチメディア……①情報等高線の平坦化（空間制約の無化）、②情報連結の任意化
- * ホームオートメーション……個々人の身体的・精神的生活をトータルにサポート
- (3)超産業社会の展望 余暇は自由時間に、発展的に解消する？
- * 都市／農村、企業／家庭、政治／経済／文化、活字／音声／音楽／映像の境界融合

～アップルクラブ～

アーティスト＆ムーンズの毎月発行無料ペーパー

苹果倶楽部

～臨時発行号Ⅱ～ '94年9月発行

苹果倶楽部さん江

ムーンさんから私に突然の寄稿依頼があったのがたまたま、岩波ブックレットの原稿をようやく脱稿した直後。しかもそれが、崔健を紹介する本だったものですから、これは書かないわけには参りません。

そこで。10月5日に香港・台湾・日本・大陸で同時発売予定の、崔健久々のサードアルバム『紅旗下的蛋』（赤旗の下のタマゴ）は、掛け値なしの問題作です。好き嫌いは分かれるかもしれませんが、わざと粗削りなジャズ風ロック。それに歌詞が凄い。香港版は歌詞カードを一部付けなかったくらい（「盒子」（箱）という曲です）。日本の皆さんは、私が訳した歌詞が読めますからご安心下さい。ジャケットがまた、とび切りいい。文字通り赤旗の下に、目隠しをした胎児が卵のかたちに眠っています。東芝EMIから2,500円、これはお買い得です。ついでに10月発行の私の本（『崔健——激動中国のスーパーstar』／今年の2月に北京で行なった崔健のインタビューをまとめたもの）も買って下さいね。なお、崔健は秋に再来日、10月25日から11月にかけて東京をはじめ数ステージの公演が決定しました。以上、注目！

（文／橋爪大三郎さん）

梅艶芳・時の真相

1988年夏、広東省の省都「広州（広東）」の街中には、梅艶芳（アニタ・モイ）の歌が溢れていた。その時初めて、私は梅艶芳を知っ

1994-6-9/13

これから20年間の日本を考える

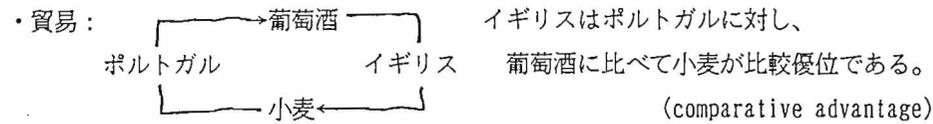
橋爪大三郎 (社会学)

□1□ 冷戦の終結と、国際経済の再編

1) 国際分業の基礎理論……比較生産費説 by D. Ricardo

	小麦	葡萄酒	
イギリス	3人	2人	
ポルトガル	2人	1人	(1単位を生産するのに必要な労働者の人数・日)

- ポルトガルはイギリスに対し、小麦でも葡萄酒でも、絶対優位(absolute advantage)を占める。
- ポルトガルの国内価格～小麦：葡萄酒＝2：1、イギリスの国内価格～同じく3：2
- 両国の価格の差異は、気候・資源の有無・生産関数(技術)の差異などにもとづく。



- 貿易の結果、両国の経済は改善される。
- 絶対優位であることと比較優位であることは、関係ない。

2) ヘクシャー・オリーン・サミュエルソンの定理……比較生産費説の拡張

- 比較優位の議論に本質的なのは、両国の相対価格であって、労働コストではない。
- 比較生産費説は、非線型の場合に拡張できる。
- 比較優位/劣位がある限り、貿易が生じ、その結果、商品価格のみならず、要素価格(賃金・利子率・地代)も均等化する。
- 貿易の利益は、大国よりも小国において顕著である。

3) ポスト冷戦世界の国際分業

- 単一市場の成立 ソ連・東欧の経済改革、中国の社会主義市場経済
- 戦後国際分業(大国アメリカ～小国日本・軽装備)の終焉
- 「価格破壊」の全面的進行 国内独自の政策(規制・保護主義)がとりにくくなる
- 中国の台頭 日本は、資本・技術の供与国へ、急速に転換する (Cf. 米～英)

□2□ 東アジア経済の隆盛

- 中国の社会主義市場経済はいつまで続くか
 - 共産党一党支配(中国大陸の政治的統一)の必要性
 - ～地方の対立、内陸農村/沿海都市の格差、民族対立、国営企業/民間企業の格差
 - ポスト鄧時代の展望
 - 法治国家への道(単位[企業丸抱え]制度→市場化)⇨民主化(×権力の家産制)

2) 東アジア経済の隆盛

- 北朝鮮の軟着陸が成功するか
- 80年代の雁行体制→90年代以降の、日中双極体制
- 言語的、文化的、制度的、歴史的共通基盤なし
 - ヨーロッパ重商主義時代にも似た、軋轢と対立抗争を内包する
 - 太平洋国家・アメリカのプレゼンスをどう織り込むか

□3□ これから20年間の日本を、どう考えるか

1) 国際化を徹底して進めること

- 国際化＝社会規格の世界共通化＝日本人と外国人の置き換え可能性

2) 大学改革 ～規制緩和&民営化の見本

- 国立大学→民営化
- 定員廃止、入学試験廃止
- 教員年限制
- 自己評価点検
- 単位互換
- 公募制の徹底
- 資源配分の競争制

3) 懸案の国内改革

政治改革、税制改革、行政改革、年金改革、教育改革、農業改革、地方分権、司法改革、など、目白押しである。

4) これらの改革のイニシアチブをとるのは、国民の意思を背景にした政治的リーダーシップ ～政治の時代に

1994-6-10/13

経営情報学会
システム 部会

日本<システム>の改革は可能か?

1994.10.21
橋爪大郎

0 講師自己紹介

はしづめ だいさぶろう……1948年神奈川県生まれ。東京大学社会学研究科博士課程修了。1989年より、東京工業大学工学部助教授(社会学)。
著書に『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『現代思想はいま何を考えればいいのか』『橋爪大郎コレクションI~III』(以上、勁草書房)、『はじめての構造主義』『社会がわかる本』(以上、講談社)、『民主主義は最高の政治制度である』(現代書館)、『小室直樹の学問と思想』(共著、弓立社)、『自分を活かす思想/社会を生きる思想』(共著、径書房)、『崔健——激動中国のスーパースター』(岩波書店)、訳書に『中国官僚天国』(王輝著、岩波書店)など。

1 日本<システム>の形成

- 1) 開発独裁テーゼ：後進資本主義国では、資本蓄積・経済発展を国家が主導する結果、市場経済と強権的政治体制とが共存する段階を経過する
日本 明治維新~昭和大動員体制 ⇨ 戦後民主制
韓国 朴正熙、全斗煥 ⇨ 金泳三
台湾 蔣介石、蔣経国 ⇨ 李登輝
中国 毛沢東、鄧小平 ⇨ ?
* 日本の場合、昭和大動員体制から民主制への転換が自生的でなく、外生的だったため、その転換が不十分となっている。
- 2) <システム>の原型：機能集団の共同体化
* もともと、日本の農村社会は、全員一致による意思決定方式を伝統としていた。
⇨ 単系出自集団(中国の宗族、韓国の門中)の欠如 ⇨ 折系的出自集団
ambilineal descent group
* 農村共同体が解体する過程で、都市の機能集団(企業、学校、……)が共同体化した。
* 日本人は、自分の所属する社会集団を、忠誠の対象(行動の規準)として選択する。
この集団は、ひとつである。(家庭は、そうした集団ではない。)
(外国でこうした役割を果たすのは、宗教や法律である。どちらも日本では重要でない。)
* すべての機能集団は、独自の利益をもち、その存続を自己目的化しはじめる。

[参考] 日本社会のモデル……“Togetherness”の優越(仮説)

- (1) 社会形式 α に支配されている個人 a と、 β に支配されている個人 b とが遭遇する。
- (2) 社会形式 α と β とは、矛盾する(可能性がある)。
- (3) その場合、i) α を α' に変化させる
ii) β を β' に変化させる
iii) 共在(togetherであること)をやめる(相手を殺害することを含む)
の、三つのケースがありうる。
- (4) 共在を重視して、自らの社会形式をつねに変化させるという行動パターンを、すべての人びとがそなえているのが、日本社会である。
- * (4)の仮説が正しいとすると、i) 日本では、個体を何らかの社会形式によって特定することができなくなる、ii) ある集団にどのような社会形式が実現するかは、偶然的である、などの帰結が導かれる。

- 3) <システム>の完成：機能集団の対立を、上位の機能集団が調整する。
* 財閥解体(持株会社の解体)→株式の相互持ち合い→資本家不在(会社の共同体化)
* 内務省の温存→行政指導・業界団体の設立→「日本株式会社」
* 冷戦(イデオロギー対立)→政治の機能停止(儀式化)→国対政治(五五年体制)
* 経済大国⇔政治小国・文化小国 西側欧米世界から、一度も「仲間」と見られたことはない。

2 中国<システム>とその改革

- 1) 中国の伝統<システム>：中華帝国~底辺における宗族(父系血縁集団)、頂点における官僚機構(非血縁的文官支配)
2) 政治の優位~血縁(忠)・人間関係(幫)の優位 > 法律の劣位
* 中国では、機能集団は共同体化しない(∵人間関係の優位)
- 3) 毛沢東の共産中国<システム>：①正統性の根拠を、モスクワでなしに中国に置く、②伝統<システム>と社会主義計画経済との結合
- 4) 鄧小平の改革開放政策：①西側の資本・技術を導入、②市場経済への段階的な移行、③共産党の一元支配を維持
* 労働市場・土地市場・生産財市場・資本市場が未整備
* 国営企業の停滞……集団所有制のもとでは、損益計算(経営の合理化)が困難
* 官僚機構の病理……肥大化、利権化、腐敗、非能率、民主的(形式合理的)でない
- 5) ポスト鄧小平の課題：①一国二制度(台湾の承認)→連邦制、②ポスト共産党

3 日本<システム>の改革は可能か

- 1) 日本<システム>は、歴史的に形成されたものなので、歴史のなかで変化しうる。
* ひとつのポイントは、<システム>の再生産メカニズム=教育にある。
受験(学校共同体への所属ゲーム)を廃止して、学校教育の自由化を
* もうひとつのポイントは、<システム>の意思決定メカニズム=政治にある。
小選挙区制を通じて、政策論争→選挙→政府の構成(民意の反映)を
⇨要するに、機能集団を再び機能集団として機能させる、ということ。
- 2) しかし、楽観はできない。
保守的ナショナリズムの台頭……日本のあらゆる社会集団は、異分子を排除し、メンバーの同質性を高めていこうとする不断の傾向をもっている。
日本という壁~日本語の壁~「日本」が存在する、というイデオロギー
- 3) そこで、もうひとつのポイントは、思想である。
日本人が誰でも感じている、「自分は日本人だ」というアイデンティティを揺るがせてしまう思想を、日本語で巧妙にのべること
その条件：①「例外的日本人」が現れて、そうした思想を語る。
②多くの日本人が、その思想を支持する(影響される)。
②の条件をみたすのは、世界性・普遍性をもった思想が、国外でも高く評価される、場合ではないか。

1994-6-11/13

日本社会学会大会
書評セッション
於：同志社大学

関説する文体への疑問
——副田義也『日本文化試論』を評す——

1994. 11. 6
橋爪大三郎
(東工大)

- 1□ 『日本文化試論』はどこで、勘違いをしているか
- 1) ベネディクト『菊と刀』は、お急ぎのやつつけ仕事である。→精密でなくて当然
- * アメリカ・戦時情報局(極東部)の、敵国研究の一貫
 - 公刊された『菊と刀』に先立つ非公開のペーパーが、軍上層部に提出されたであろう。
 - * 研究の目的は、当時の日本人の信念=行動体系を再構成し、占領政策に役立てること(プラクティカルな課題 ⇒組織神学systematic theology 的努力)
 - 占領するのはアメリカだから、アメリカの価値体系との差異が記述できればよい。
- 2) ベネディクト『菊と刀』でもっとも評価できるのは、大づかみな全体性・論理性
- * しかし『日本文化試論』は、分析のサイズが細かすぎ(例：各章の断片的な紹介)、こうした全体性・論理性に注意が向いていない。
 - * ベネディクトの集めたデータが偏っていたり、つまらない本を援用したり、日本文化に通じていなかったりするの当たり前で、そんなことを指摘しても始まらない。

- 2□ 『菊と刀』は、どこまで成功したのか
- 3) 本書の性格は、①文化人類学の学術研究×②アメリカ人を対象にした啓蒙書 …半々
- * アメリカの価値観は自明のものとして、暗黙の前提になっている。←日本の読者に困難
 - * 文化人類学の科学性、実証性は、アメリカ人が、日本人を「もうひとつの合理性」として理解する場合、説得の手段。(訳81頁：太平洋諸島との類比、296頁：共感呪術)
 - * そうした距離感が、高文化の国・日本社会の複雑性を、適度な単純さで描くのには有用
- 4) 再構成の対象：「日本人が国民全体として抱いている、人生に対する仮定」訳 291頁
- 前提・仮定を押さえれば、全体が理解できる ⇒合理的・演繹的な構成を想定cf訳17頁
- * 恩(天皇の一 / 義理(有限の債務) ↔ 恥 / 誠実(羸乗操作子)
 - 親の一) 義務(無限の債務) ~ 忠・孝
 - * 「彼らは「人間の義務の全体」は、あたかも地図の上の諸地域のように、明確に区別された幾つかの部分に分けられているように考えている。……人生は「忠の世界」「孝の世界」「義理の世界」「仁の世界」「人情の世界」、その他なお多くの世界から成り立っている」訳 224頁 ~ 「日本の道徳の原子論的状態」訳 240頁 ~ 日本文化の型
 - * ⇒天皇制：「彼らは「忠」を、地図の上の単なる一つの領域ではなくて、道徳のアーチの要石にしようとした」訳 240頁 『軍人勅諭』『教育勅語』~ トーラー
- 5) ベネディクトの分析では、戦前の天皇制は、西欧に対する二次的適応(教育)の産物であったことになる ex. 階層的秩序の強調
- * “ベネディクトの分析は歴史的背景を無視している” “支配階級のイデオロギーによって、日本人全体を代表させている”(鶴見和子)といった批判は、あたらない。
 - * その分析を延長すると、戦後の日本が「道徳の原子論」に舞い戻ることは、容易に予測できる。実際、事態はそのように進んだのではないだろうか。

〔参考文献〕

島田裕巳 1994 「恥の文化としての日本——『菊と刀』への反発と受容——」『日本という妄想』:39-53. 日本評論社。

※ 書評セッション

1. 関説する文体への疑問

——副田義也『日本文化試論』
——ベネディクト『菊と刀』を
読む——』を評す——

東京工業大学 橋爪大三郎

476頁におよぶ大部な本書がまるごと、ベネディクト『菊と刀』(1946)の解説に充てられている。原著の章立てに対応した各章は、まず内容の要約から始まり、ベネディクトが参照した文献との照合、ベネディクトを批判した諸論文の検討、時代背景や学説展開の説明・紹介といった順序で、ゆったりと進んでいく。その指摘は、先行する業績の丹念なフォロー(つぎはぎ)であるとは言えても、特に新しい発見を含むわけでもない。本書は何を目指すのか?

著者・副田氏は、本書は二つの主題を持つと言う。《第一主題は『菊と刀』である。……第二主題は日本文化である……。》(1頁) このことが不可解である。もしも日本文化そのものを自身の視覚から論じたいのなら、『菊と刀』をあいだに挟むなどという迂遠な方法を取らずに、直接論じればよい。また、もしも『菊と刀』という業績をそのものとして問題としたい(批評したい)のなら、第二主題については禁欲して、もっと鋭く『菊と刀』のテキストに切り込むべきだ。結局、本書はどっちつかずである。それは、とりあえず『菊と刀』に関説しておけば、日本文化について論じたことになるという楽天的な前提から、本書が出発しているためであろう。

『菊と刀』に対する読解として、本書のもっとも不満な点は、断片的であることだ。原著『菊と刀』はシステマティックな著作であり、日本社会を理論的に再構成するためのモデルを提示している。それは、天皇制・日本を解明する「組織神学」的試みだと言ってもよいだろう。しかし本書は、原著の構成をなぞる十三章に分断され、しかもその各章が、原著からの十いくつの命題から散開していく。著者・副田氏は、そうした個々の命題の当否や解釈に終始し、『菊と刀』という書物の全体構造を復元することにはあまり目が向かない。個々の命題の取り扱いにも、疑問を感じる。たとえば、「罪」と「恥」とを対比する文脈で、柳田国男をひきつつベネディクトを批判し、日本の伝統文化にも《罪の文化》(292頁)を認めることができるというが、キリスト教の“sin”と、仏教の「罪」とを単純に等置して議論を進めているとしたら軽率ではないか。またたとえば、恩の概念に関連して、《ベネディクトが、日本文化の親の恩を借金にたとえて説明するのは、その物質的側面に注目してのことである》(421頁)という趣旨の指摘を繰り返しているが、プロテスタンティズムにおける借金(の返済不能状態)は、物質的・経済的な問題ではなく社会的全人格を賭けた問題で、まさしく日本の「恩」の概念と類比するにふさわしいものではないか。総じて『菊と刀』の個々の論点に対する著者のコメントは、第三者の議論を援用したものが大部分であるうえに、しばしば周到さに欠けている。

いっぽう日本文化論の試みとして、本書のもっとも不満な点は、独自の主張がわずかしかないことだ。それらは「終章 二つの補遺」の後半「日本文化の可能性」に、《断片的ノートの収集の形式》(413頁)で集められている。たとえば、①日本文化の伝統である無私・無我・貧困の信仰が先進資本主義国の行き過ぎた豊かさを制御できるのではないか、②同じく自然の恩、社会の恩の思想は、福祉国家の思想的基盤となるのではないか、③同じく「いき」の倫理は、性愛の無規範状態に有効な処方なのではないか、④同じく日本の罪の文化は、国家的エゴイズムを否定する思想的基盤となるのではないか、など。これらはよくある単純な思想的反動の表明ともみえるが、論評できるほど全面的に展開されているわけではないので、判断を留保しておく。

1994-6-13/13

筑波大学・第一学群
社会学類文化講演会

日本が「普通の国」になる日
——ポスト冷戦時代のアジア地図——

1994. 12. 7
橋爪大三郎
(東京工業大)

□1□ 日本<システム>の形成

- 1) 開発独裁テーゼ：後進資本主義国では、資本蓄積・経済発展を国家が主導する結果、市場経済と強権的政治体制とが共存する段階を経過する
 - 日本 明治維新～昭和動員体制 ⇒ 戦後民主制
 - 韓国 朴正熙、全斗煥 ⇒ 金泳三
 - 台湾 蔣介石、蔣経国 ⇒ 李登輝
 - 中国 毛沢東、鄧小平 ⇒ ?
- * <システム> : K.v. Wolfereen の用語。明確な意思決定機構である「国家」の反対物。
- * 日本の場合、昭和動員体制から民主制への転換が自生的でなく、外生的だったため、その転換が不十分となっている。
- 2) 日本<システム>の原型：機能集団の共同体化
 - * もともと、日本の農村社会は、全員一致による意思決定方式を伝統としていた。
 - ⇒ 単系出自集団 (中国の宗族、韓国の門中) の欠如 ⇨ 折系的出自集団 ambilineal descent group
 - * 農村共同体が解体する過程で、都市の機能集団 (企業、学校、……) が共同体化した。
 - * 日本人は、自分の所属する社会集団を、忠誠の対象 (行動の規準) として選択する。この集団は、ひとつである。(家庭は、そうした集団ではない。)
 - (外国でこうした役割を果たすのは、宗教や法律である。どちらも日本では重要でない。)
 - * すべての機能集団は、独自の利益をもち、その存続を自己目的化しはじめる。
- 3) 日本<システム>の完成：機能集団の対立を、上位の機能集団が調整する。
 - * 財閥解体 (持株会社の解体) → 株式の相互持ち合い → 資本家不在 (会社の共同体化)
 - * 内務省の温存 → 行政指導・業界団体の設立 → 「日本株式会社」
 - * 冷戦 (イデオロギー対立) → 政治の機能停止 (儀式化) → 国対政治 (55年体制)
 - * 経済大国 ⇨ 政治小国・文化小国 西側欧米世界から、一度も「仲間」と見られたことはない。

□2□ ポスト冷戦時代の幕開け

- 1) 曲がり角を曲がった日本——戦後日本の復興と繁栄を支えた条件が、崩れつつある。
 - * 冷戦
 - i 米ソ対立・核戦争の恐怖 → 自由世界の盟主 = アメリカ → 日米安保条約
 - ii 自由貿易 → 資源の輸入・製品の輸出 (+技術移転) が確保される
 - iii 保守/革新の対立 → 国会の機能停止 → 自民党一党政治・官僚支配
 - * ポスト冷戦
 - i ベルリンの壁崩壊・湾岸戦争 → 一極 = 多極世界 → 日本の常任理事入り
 - ii 世界単一市場の形成 → 中国・東南アジアの追い上げ → 空洞化
 - iii 55年体制の崩壊 → 小選挙区制 → 「多数派」形成のための政治
- 2) 日米関係の変質
 - * アメリカの世界戦略の変化 二極世界 ⇨ 一極 = 多極世界 (EC/NAFTA/APEC/……)
 - 経済のブロック化 ⇨ 経済・制度の多国間構造調整 (⇨ ついでに安全保障も)
 - * アメリカ中心体制の制度疲労 双子の赤字・ドル安・防衛負担 ⇨ 国益突出型の行動も
 - * 対日観の変化 自由主義陣営に属していれば、少々変な国家でもかまわない
 - ⇒ 同じ価値観・ルールに従う仲間なのかそうでないのか、はっきりしろ!
- 3) 空洞化 ← 国際分業のやり直し

* 比較生産費説 (リカルド『経済学および課税の原理』による国際分業の基礎理論)

	葡萄酒 1キ。	小麦 1キ。	
A国	2人・日	3人・日	絶対優位 absolute advantage
B国	1人・日	2人・日	比較優位 comparative advantage

- * “A国はB国に対し、葡萄酒よりも小麦において、比較優位である” → 貿易の利益
- * ヘクシャー = オリー = サムエルソンの定理……上記の、非線型の場合への拡張
- * “自由貿易の結果、製品価格ばかりか、要素価格 (労賃・地代・利子率) も均等化する”
- 4)

アメリカ：農業・先端技術・資源・大国	⇒	アメリカ：農業・先端技術・資源・大国
日本：工業・量産技術・労働・小国	⇒	日本：? ・ ? ・ ? ・ ?
		中国：工業・量産技術・労働・大国
- * 日本は基礎科学・技術開発に特化を急げ!

□3□ 中国<システム>とその改革

- 1) 中国の伝統<システム>：中華帝国底辺における宗族 (父系血縁集団) 儒教/道教の二重体制 頂点における官僚機構 (非血縁的文官支配)
- 2) 政治の優位～血縁 (忠)・人間関係 (幫) の優位 > 法律の劣位
 - * 中国では、機能集団は共同体化しない (∴ 人間関係の優位)
- 3) 毛沢東の共産中国<システム>：① 正統性の根拠を、モスクワでなしに中国に置く、② 伝統<システム>と社会主義計画経済との結合
- 4) 鄧小平の改革開放政策：① 西側の資本・技術を導入、② 市場経済への段階的な移行、③ 共産党の一党支配を維持 (→ 89. 6. 4天安門事件)
- 改革開放政策は、試行錯誤的なもので、郷鎮企業の大発展は予想外の追い風だった。
 - * 労働市場・土地市場・資本市場・金融市場が未整備
 - * 国有企業の停滞……集団所有制のもとでは、損益計算 (経営の合理化) が困難
 - * 官僚機構の病理……肥大化、利権化、腐敗、非能率、民主的 (形式合理的) でない
- 5) ポスト鄧小平の課題：① 一国二制度 (台湾の承認) → 連邦制、② ポスト共産党

□4□ 日本<システム>の改革に向けて

- 1) 制度の創造 明治維新 (欧米制度の移入) → 戦後改革 (アメリカの真似) → 平成改革 日本知識人は、責任ある立場で制度を形成する努力を怠ってきた (ただの文句言い)
- * 市場経済 + 政府 (公共性・公平性・国際性) + 民間組織 (NPO) “成熟” の時代へ
- * 制度改革は、数百兆円の先行投資に匹敵する。(赤字国債 → 公共投資、を繰り返すな)
- 2) 教育改革 <システム>の再生産メカニズム = 教育 受験 (学校共同体への所属ゲーム) を廃止して、学校教育の自由化を
- * 知識・文化に対する投資/外国人の招聘政策/「市民権」制度/明確な国家目標
- 3) 政治改革 <システム>の意思決定メカニズム = 政治 機能集団を再び機能集団 小選挙区制：政策論争 → 選挙 → 政府の構成 (民意の反映) として機能させる
- * ほかに行政改革 (規制緩和/地方分権/官庁統廃合…)、土地改革 (都市計画…) など
- 4) ありうべき反動～保守的ナショナリズム：「日本」が存在するというイデオロギー
- 5) 思想闘争：日本人が誰でも感じている、「自分は日本人だ」というアイデンティティを揺るがせてしまう思想を、日本人が日本語で巧妙にのべること
- その条件：① 「例外的日本人」が現れて、そうした思想を語る。
- ② 多くの日本人が、その思想を支持する (影響される)。
- ②の条件が満たされるのは、①の思想が国外でも高く評価される場合に限られる?